

# 平成 24 年度高麗大学保健科学大学短期 海外研修に行つて

看護学部 1 年 121078 三浦真友子

## I. はじめに

私たち群馬県立県民健康科学大学の学生 12 名と教員 2 名は、平成 24 年 9 月 17 日から 21 日までの 4 泊 5 日間韓国を訪問し、高麗大学保健科学大学との交流を深めたり、韓国の医療施設の見学を行つたりした。

以下に、主として韓国の授業について、また、異文化体験について、体験したことや考えたことを記した。

## II. 授業について

### 1. 授業の様子について

私たちが受講した講義は、講義の初めから終わりまですべて英語で行われて、1 クラス 15 人ほどであった。日本の大学に多く見られるような 90 分授業ではなく、50 分間の講義ごとに 15 分間の休憩をとっていた。どの学生も熱心に講義を受けていた様子であった。

のちに高麗大学の学生の一人に確認したところ、大学のすべての講義を英語で行っている訳ではなく、新しく就任した教員のみが一定期間英語で講義をする規定になっており、先の学生によると、高麗大の学生にとっても英語での講義の受講は楽ではなく、入念な予習が不可欠であるというようであった。

### 2. 授業の内容について

当初、私たち看護学部の学生は同大学の保健行政学科の「健康増進学」を受講する予定であったが、急きょ予定が変更になったため、看護学部の学生も放射線学科の「放射線治療計画」という講義を受けることになった。

講義の内容は、IMRT の説明などだったらしいが、あまりよく理解することができなかつた。

## III. 異文化体験について

### 1. 韓国の街の様子について

ソウル市内は東京とそれほど大きな違いはなく、高層ビルが建ち並んだ発展した都市のように見えたが、ショッピングモールや駅の構内などでよく見かける、大型のスマートフォンのようなタッチパネルで誰もが地図や案内など好みの情報を入手できるシステムや、すべての地下鉄のホームに設置された転落防止のガラスの自動ドアなどを見ると、日本よりも技術が進んでいるように思われた。しかし、郊外の狭い路地に一步踏み入れると、肉や魚や青物がまるごと山のように積まれた市場など、まだまだ発展途上の部分も垣間見えた。

## 2. 韓国の人々について

一見、日本人と変わらないように見えるが、顔の特徴や歩き方までもが日本人とは異なっているという話を聞いた。ソウル市内の大きなショッピングビルで買い物をしていると、店員は顔を見ただけで日本人と判断できるらしく、流ちょうな日本語で話しかけられたことが幾度とあった。

また、近頃日韓関係があまりよくないが、出会った韓国の人々は温かく日本の私たちを受け入れてくれたように思われた。

## 3. 言語について

研修中は、日本語を理解し話すことができる高麗大の学生が付き添って下さったため、韓国語を理解できなくても支障なく 5 日間を過ごすことができた。だが、高麗大との交流会では日本語を話せない学生もいたため、そのような学生とコミュニケーションをとるには英語を使わなければならず、自分の英会話力のなさにもどかしさを感じた。また、私が使える韓国語は簡単な挨拶だけだったが、あともう少し基本的な日常会話のフレーズを話せるようになっていたら、例えば市場においても現地の人たちと韓国語で会話を楽しめたかもしれないと思うと、非常に悔しさを覚える。

## IV. 考察

日本と韓国は地理的に大変近い国どうしでありながら、互いの国に対して良い印象をもっていないときく。実際、私自身、今回の研修に参加するまでは、近頃の領土問題の影響で、韓国の人々は日本人に対して冷たく扱うのではないかと心配の種は尽きなかったが、研修中に会った人々はみな親切で温かく、韓国に対して良いイメージを抱くことができた。高麗大との交流会の中で、学生の一人に日韓関係について意見を聞いてみると、「互いに自分の国を悪く思うことはないと思う。一番いけないのは感情的になることだ。」と答えが返ってきたことが印象的だった。互いに近くにある国だからこそ、今回の交流会のようにもっと多くの人々が互いの国と交流を深めれば、日韓も以前より良い関

係を築くことができるのではないかと考える。

そして、この研修を通して自分自身に新たな課題ができた。それは、英語をもっと話せるようになること。できたら、それ以外の言葉も習得したい。外国語を話せるようになって、海外の人々と交流することができるようになると、自分の世界が広がるからである。今回の研修から学んだことを自分の生活の中に生かしつつ、残りの学生生活を過ごしていきたい。